

## 「未病の改善に関わる薬用植物の成分探索」

助教 古川 めぐみ

高齢化の進む我が国にあって、医療費の増加は深刻な問題であり、今後「未病の対策」がますます必要になると考えられる。未病とは、2000年以上前の中国の書物「黄帝内経素問」の中に「聖人は未病を治す」と書かれている概念であり、現在では検査値に異常があるが症状が出ていない状態と、検査値に異常はないが自覚症状がある状態の両方を指している。

今回の研究では、検査値に異常があるものの症状が顕在化していない状態の改善に関わる薬用植物の成分探索を行うことを目的に、スクリーニングを実施した。

スクリーニング方法としては、老化に伴い増加する疾患に関与することが知られており、検査値の異常等に関わるとされている抗酸化作用、最終糖化生成物抑制作用及び抗炎症作用の3種を選択し、評価した。サンプルとしては熱帯諸国の植物300種、東南アジアの植物15種及び南米の植物15種について検討した。

その結果、135種の植物に抗酸化活性を、71種の植物に最終糖化生成物抑制活性を、75種に抗炎症作用があることを見出した。

現在、抗炎症作用及び抗酸化活性の認められた東南アジアの薬用植物について成分研究を行っており、新規化合物1種を含む計15種の化合物を単離・構造決定している。また、別の東南アジアの薬用植物について3種の化合物を単離・構造決定している。今後さらに活性が認められた他の植物についても成分探索を進め、活性を検討していくことで「未病の対策」の一助となりえるよう研究を進めていきたい。

今回戴いた助成金の一部を使用した研究を、以下の論文として発表したことを合わせて報告する。(M. Furukawa, S. Kamo, M. Makino, M. Kurita, K. Tabata, K. Matsuzaki, T. Suzuki, T. Uchiyama. Triterpenoid glycosides from *Ladenbergia hexandra* Klotzsch, *Phytochemistry*, **136**, 147-155.)。